

常識、摩擦、そして発展



者

安田 誠*

How to Survive in Coming Century
Key Words : common sense, conflict, growth

1. はじめに

大阪大学に助手として任官して以来5年以上が経過した。実質的に研究活動を始めた時期、すなわち研究室配属になった大学4年生の時から数えると、10年を超えたことになる。もちろん研究者としてはほんの駆け出しの身である私であるが、この短い間にも多くの刺激的(?)な出来事を経験してきた。現在のところ日々、研究および教育に関して試行錯誤と反省の毎日である。今回「若者」への執筆を機会に、最近思うことや悩んでいること、また漠然とはあるが希望らしきことを書いて、「若造」のたわ言として述べていくことで本稿とさせていただきますと思う。

2. 常識と異文化との狭間で

10年という長いようで短い間にも、幾つかの節目を過ごしてきたように感じる。研究の進行状況に伴う節目。卒業、結婚などプライベートな問題による節目。そして大学での年度ごとに訪れる節目等である。節目というのは、別れと出会いを伴う場合が多い。その対象は人であったり、場所であったり、時には研究テーマであったりいろいろである。それらの節目における出会いの部分では、新しい概念や文化と自分の元々持っている常識のぶつかりが生じ、少なからずストレスが生まれる。このような「異文化との摩擦」について、数少ない経験の中からシリ

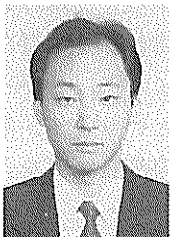
アスな問題と気楽な話題を織り交ぜて以下に記すことにする。

3. 研究に関して

大学4年生での研究室配属は、第一の節目であったろう。そこでいきなり異文化にぶつかった。ライフスタイルが大きく変わり、研究センターの生活になることは事前に予想していたのでほとんどストレスは感じなかった。しかし本業において悩みを抱えた。研究室に入ってから約1年間くらいは、研究室での報告会や勉強会の内容のかなりの部分が理解できなかった。「それではいけない」となんとかいろいろ努力して、漸くそこそこ筋道をたててわかってきたと感じてきた頃に、初めて学会に参加させてもらった。ここで再びショックを受ける。またまた理解不能なのである。もちろん知識不足と勉強不足は認めていたが、もっと大きなものが自分に欠けていると感じた。今となれば、少しそのなぞ解きができる。研究グループ、または学会を取り巻く環境の根底に流れている常識的な知識や言葉(専門用語という意味ではない)に関する認識の欠落であった。もちろんその常識も時とともに変化していくことは言うまでもない。この世のあらゆる研究は何らかの形でその常識であるものに少しずつ変化を加えていくものである。ブレークスルーと評されるような研究は新しい常識の種を与える中心となるものである。

結局この時は、自分の力があまりに貧弱だったため、異文化との接触によりすっかりおしつぶされた格好になった。もしこのような状況の時に、しっかりとした力が備わっておれば異文化との接触により、新しいエネルギーを生み出す可能性があったと思う。残念ながら初の学会参加の時は、発展的なものを得たという実感なく終わった。本当はなにかを得ていたのだと思うのだが...。その後、何年かたって、ひょんなことから全くこれまで縁のなかった分野の

* Makoto YASUDA
1967年3月11日生
1995年大阪大学大学院・工学研究科・
応用精密化学専攻博士後期課程修了
現在、大阪大学大学院・工学研究科・
分子化学専攻・合成化学講座、助手、
博士(工学)、有機合成化学
TEL 06-6879-7386
FAX 06-6879-7387
E-Mail yasuda@ap.chem.eng.
osaka-u.ac.jp



講演会とその懇親会に参加させていただく機会を得た。またまた理解困難なことが多かったが、少し余裕をもって楽しむことができた気がした。

4. 学生との接点において

私の所属する研究室は学部4年生と大学院生と教官によって主に構成されている。大学組織の性格上、卒・修了と配属によって毎年約30パーセントものメンバーがごっそり入れ替わることになる。定期的に訪れる節目である。学生の平均年齢は常にほぼ一定値であるのに対し、私の方は確実に増えていく。個々の学生の気質の違いと世代の違いの両要因による異文化と接する。いろんな部分で学生に対し理解不能とを感じる。学生もこちらに対して同じように感じているはずである。これらの摩擦は、お互いのじっくりとした付き合いの中で発展的に解消していく場合がほとんどである。お互いが異文化との衝突と融合、発展を経験する。こちら側が認識を新たにし、勉強することともとても多い。私は立場上、研究を通して教育・指導しなければならないのだが、実際のところは一緒に悩みを共有し、ともに一喜一憂しているに過ぎない。「若造教官」なりのやり方と都合よく解釈している。これからも学生といかに接していくかは自身への大きな課題であるが、楽しみなことでもある。変化の激しい学生の髪の色も、当初は慣れずにとまどったものだが、最近はなかなかカラフルでかっこいいもんだと感じるようになった。これは本当にじっくり付き合ってみて感じた実感である。何十年か後には金髪教授が大活躍している時代がやってきてもおかしくない。このように、学生が定期的に大幅に入れ替わることは研究室にとっては幸せなことであると思える。

5. 閑話休題・留学中に

1998年の秋から約1年間、アルバータ大学(カナダ・エドモントン)に博士研究員として留学する機会に恵まれた。これは私にとって大きな節目であり、異文化体験の宝庫であった。気楽な話題を中心に以下に記す。

大学の組織で特筆すべきは、分業制度が行き渡っていることだ。人の異動が多いことや、個人主義の土壌が影響していると思われるが、わたしには行き過ぎと感ずることもあった。ただ、研究に関してはスムーズに新参者でも入っていくことができる。種々

の測定機器の維持管理および測定に、多くの専門のprogがついている。日本でも同様のシステムになっているが、人員の差はたいへん大きい。また、化学実験に用いる試薬の購入管理は化学系全体で一括して行われ、個人は必要量だけを使うことができる。ここにも専属のprogが配置されている。もちろん研究員は、研究のみに全力を尽くすことを求められているわけで、便利さと同時に責任を必然的に負うのである。

なぜかカナダの文具売り場ではシャープペンシル(これでは通じない。メカニカルペンシル)が隅に追いやられている。たいていショーケースに入っていて、ふだんは手に触れられない位置にある。置かない店もあった。鉛筆を使う人もそれほどいない。主役はボールペンとソフトペンである。消せて便利なのになぜあまり使われていないのかは疑問として残った。その点日本人は消せるペンと消せないペンを器用に使い分けられていると思う。文章を書くという観点での究極の消せるペンといえばワープロであるから、これは日本人向きのような気がする。この話題は日本ですでにペン文化になっている人は気づきにくいかもしれない。

カナダ人の学生に、私の免許証の写真を見せた時のこと。「なぜ、まじめな顔をしてるのか？」と質問された。確かに彼の写真は笑っていた。それも満面の笑顔である。「これは日本流なんだよ」と答えておいた。顔写真ひとつでも、常識が違うもんだとお互いが感心した。確認するのは忘れたが、むこうでは指名手配犯の写真も笑っていたかもしれない。

日本人はイエス、ノーをはっきりいわないので話がよくわからない、というのはよく言われるいわば常識的知識となっている。よほど欧米人はしっかりと自分の意見を持っているのかと思っていたが、実態は別のところにあった。つまりこの話は、半分当たっているが半分はずれている。アメリカ人だって意見のはっきりしない者はたくさんいるし、意見がはっきり言えない状況の時だってある。ただそういう時彼らは、どうしたらいいかわからないとはっきり言うということだ。厳密に言うと言わざるを得ない言語体系になっている。日本語のように、わからないのに、分かったように発言するという手法が無いとも言える。その点日本語の方が高等技術?を含んでいるのだろうか。

イエス、ノーははっきり言おうと心に決めていた

つもりであったが、ついつい日本流の癖がでたことがあった。現地に入って10日後ごろの朝、研究室のメンバーの一人が「コーヒーいる？」と親切に聞いてくれた。私は感激して「ありがとうございます。昨日寝るのが遅かったので、とてもうれしいよ。」と拙い英語で答えた。ところが彼は「いるの？いないの？、yes or no?」、となったわけである。

カナダから帰国してラジオのニュースに驚いた。とある郵便局で2000年を記念する年賀はがきへの消印を何千枚か逆向きに押ししてしまったとのことであった。何に驚いたか。カナダではこんなものはニュースにならない。そんなことはいかにもありそうな日常であるからだ。しかしここは日本だ。郵便局員がそれぞれの家庭へ謝罪に訪問したらしい。これは日本の誇るべき状態を物語るニュースとして私はとらえている。

ではカナディアンは仕事をしないのか。断じてそんなことはない。とある寒い冬の夜、私の中古のクルマの調子がおかしくなった。時刻は晩の11時。明朝出勤前に修理工場に行こうと考えその工場の案内広告をインターネットで確認した。なんと驚いたことに夜の2時までやっている。さっそくクルマを運び込み、その場でチェックを受けた。修理は運良く短時間で終了したので、翌日に影響なく事無きを得た。

時間に関してもう一つの話。ショッピングセンターは平日は夜の9時まで営業している。ところが日曜日に限り夕方5時に閉店する。夏の日長い時期にはまるで真昼に店じまいの感があった。日曜の夜は家族で家にてゆっくり過ごすべしということらしい。

私の住んでいたアパートの隣には大学の所有する屋内テニスコートがあった。もちろん普段は予約がいっぱい。運良く空いていれば大学関係者はタダで使わせてもらえる。ところが土曜の夜は空いている。おかげでたっぴりと楽しむことができたが、家族でゆっくり家で過ごすべきだったかもしれない。

6. 再び研究に関して

留学中の体験は、私にとって常識の概念を覆らせた。あたりまえとと思っていることも異なった切り口で見る必要性を感じた。特に研究においてそうすべきだと感じている。研究においては新しい発想、独

創的な発想が重要であることはいうまでもない。これらは異文化との接触におけるストレスの中で生まれ、育まれていくような気がする。理解不能ですべてのことが疑問だらけの心地の悪い状況を、倍返しで大きく発展に繋げられるように努力していきたいと思う。そのためには、自分を磨いておかないといけない。理解不能に陥った初めての学会参加時のことは必然的でありかつ、すばらしい体験であったと今は思えるようになった。

7. 最後 に

現在、大阪大学工学部は大きく4つの大学科に区分されて新生を受け入れている。2年生に進級する際に、専攻する学科を選択し細分再編成される。この制度により彼らは専攻を決定するまで1年間を様々な情報収集に費やすことができる。もうひとつ重要なことは、幅広い分野に散らばった友人達と将来にわたり、つながりを持つことが可能である点であろう。本年度、私は初めて新1年生の担任業務に微力ながら携わり、この点において今の学生をうらやましく感じた。教官側としても担任業務を通じて、同じ工学部内でありながら学科の違いによってこれまで全く面識の無かった先生方と共に交流の機会を持つことができ、貴重な体験をさせていただいたと思っている。今後いつか有益なものとして還ってくると信じている。

同じ環境の中にいるもの同士には、以心伝心というのがあり、非常に心地よい環境の中でものごとが進む場合が多い。これは年月をかけて培われたかけがえのない文化、伝統である。これに反して、異なる環境で過ごしてきたもの同士にとっては理解不可能な部分をその都度補い合わなければいけない。この両側面をつねに意識しながら、効率良く新しいものを生み出し、発展を目指すのが最善の方法と感じる。ただ後者の面は、日々の研究生活の中では強く意識して行う必要がある。異文化の疑似体験を積極的に行う必要性である。論文ひとつを読むにも異文化の疑似体験と感じながら、留学した気持ちになって読んでみたら楽しいだろうと学生に提言したことがあるが、実は自分に言い聞かせている。新世紀を生き延びるために、自分の仕事を一生懸命に進めながら、視野を広げて混沌とした理解不能の世界に、意識して積極的に飛び込んでいきたいと考えている。